

“Trailokyavijaya mahākālparāja” の研究

—mūlatanra を中心にして—

川 嶋 健

“Trailokyavijaya mahākālparāja” (以下 TLV.) は『真実撰経降三世品』の釈儀軌¹⁾と言われる瑜伽タントラである。現存するものは西藏大蔵経中に 1 本²⁾と、及び大正蔵経中に部分訳が 2 種 4 本が残されている。

酒井博士の研究によればこのタントラは「『理趣経』の祖典とも考えられる³⁾」文献で、『理趣経』の成立を考察する上でも過看し得ないとも思われるが、その後特に研究は進んでいない。

TLV. は mūlatantra (デルゲ版=De. 10a2-44a7) と, uttaratantra (De. 44a7-57a7) に二分され, mūlatantra は, (1)金剛吽迦羅の章 (10a²~23a³); (2)如来の章 (~24b³); (3)金剛手の章 (~32a⁵); (4)観自在の章 (~34a⁵); (5)虚空蔵の章 (~35b⁶); (6)金剛拳の章 (~39b¹); (7)文殊童子の章 (~40b³); (8)金剛輪の章 (~41a⁵); (9)虚空庫の章 (~41b⁷); (10)弥勒の章 (~42b¹); (11)五類諸天の章 (~44a⁷); の 11 章により構成されており, (1)では「真実撰経降三世品」中に見られる「大自在天, 諸天の降伏」や「外金剛部廿天金剛名灌頂」が説かれている⁴⁾。また, (3)~(10)は金剛手から弥勒までの「八大菩薩」が順次各々の章で教主に代わって自身の真言と四種曼荼羅を説くと言う形式で展開されている。

「八大菩薩」には数種のグループが認められるが, その内, 金剛手, 観自在, 虚空蔵, 金剛拳, 文殊, 纒発心転法輪, 虚空庫, 摧一切魔の八大菩薩は『真実撰経』及び『理趣経』のみに現われるグループ⁵⁾で, 特に『理趣経』所説のそれは, 図像化に迄進んだのである⁶⁾。そして TLV. では「纒発心転法輪」が「金剛輪」⁷⁾, 「摧一切魔」が「弥勒」となっているが, 明らかな類似が認められるのである。よって, TLV. は理趣経とどのような関係にあったのかを以下で考察したい。

まず TLV. の成立年代であるが, 蔵訳は rin chen bzañ po によるもので, また, 漢訳は, 不空訳『金剛頂降三世大儀軌法王教中観自在菩薩心真言一切如来蓮花大曼拏羅品 (大正蔵 No. 1040. Vol. 20)』が, 前述の (4)「観自在の章」に相当し, 不空訳『金剛頂経瑜伽文殊師利菩薩法 (同 No. 1171. Vol. 20)』, 同『金剛頂超三

界経説文殊師利五字真言勝相(同 No.1172. Vol.20)』、金剛智訳『金剛頂経曼殊室利五字心陀羅尼(同No.1173.Vol.20)』の3本が(7)「文殊童子の章」に相当することがあきらかとされた⁸⁾。よって、少なくとも、(4)「観自在の章」と(7)「文殊童子の章」の2章は不空以前に成立していたことになる。また、漢訳の「金剛頂降三世大章法王教中」や「金剛頂超三界経説」等の記述にも注意したい⁹⁾。

以下は、「虚空蔵の章」の一部である。

TLV.: dbaṅ sbyin pas de bshin gśégs pa thams cad la mchod pa byaḥo // de nas nor sbyin pa ni dge sbyoṅ daṅ bram ze la sogs pa la ci nus kyis sbyin no // de nas zas sbyin pa ni byol soṅ rnams la sbyin no // de nas mi ḥjigs paḥi sbyin pa ni gyod khrid thmas cad la sbyin no // de nas chos sbyin ni mi snaṅ baḥi sems can rnams la sbyin no // (De. Ta. 35a⁵⁻⁶).

理趣釈(下):「以金剛寶灌頂一切如來。義理施者惠施沙門婆羅門資緣具。法施者為施不現形與天龍八部等說法等。滋生施者施與傍生之類也」(大正藏 Vol.19, p.612C14-17)。

それぞれ、灌頂施、義利施、資糧施、無為施、法施等の四種施と五種施が説かれているが、布施の対象が説かれている点に注目したい。この、布施すべき対象は、『理趣経』類本中には見られないことから、『理趣釈』独自の解釈と考えられていたのである¹⁰⁾。

以下は、「金剛拳の章」の一部である。

TLV.: de bshin gśégs pa thams cad kyi // lus daṅ ṅag sems rdo rje rnams // bsdus pa khu tshur shes bya ste // bciṅs na rdo rje khu tshur bśad // (De. Ta. 36b⁴⁻⁵).

理趣釈(下):「是故広瑜伽中説。身口意金剛合成名為拳。一切如來縛是為金剛拳。」(大正藏 Vol.19, p.613A27-29)。

この『理趣釈』の説を、梅尾博士は『真実撰経』の説に基づくもの¹¹⁾としているが、同様の表現が TLV. にも見られるのである。

更に、TLV. 「金剛拳の章」中には十七尊の五秘密曼荼羅¹²⁾が説かれているのである。以上より、TLV. の mūlatantra に関して、次のような特徴があげられる。(1)構成は理趣経に近似している。(2)『理趣釈』と共通する記述を持つ。(3)五秘密曼荼羅を説く。(4)四種曼荼羅を説き、『真実撰経降三世品』との共通点を持つ。(5)不空訳の部分訳が存在する。以上の点を踏まえて、TLV. の八大菩薩の各章が成立当初から整っていたか否かを検討すると、まず第一に、各章の分量に差がありすぎ、特定の章のみが偏重されている。また、不空訳についても、「虚空蔵章」を3本も訳しながら、なぜ観自在と虚空蔵以外の章を訳さなかったのかと

いう疑問が生じてくる。逆に、幾つかの章が存在していて、それらが『理趣経』の影響で残りの章を増広して再構成された、と見る場合は、不空訳の「降三世大儀軌法王教中」等の記述が問題となろう。八大菩薩は『般若理趣分』『真実撰経』にも登場することから、この八大菩薩の起源は、遅くとも7世紀までと見ることができる。儀軌化が進んでいる TLV. が当時既に成立していたとは考え難いが、しかし、「八大菩薩が教主に代わって心真言を説く」という形式は不空訳を以て初出となるので、TLV. はその頃の理趣経類本と関わったとも考えられる。

また、更に『理趣釈』の「摧一切魔菩薩理趣品」には、「一切有情調伏即為菩提者。本是慈氏菩薩也。由此菩薩内入慈定。」(大正蔵 Vol.19, p.615A2-3) という記述が見られるが、摧一切魔菩薩を弥勒菩薩と同体であるとする説は、すべて『理趣釈』のこの部分に依拠しているのである。『理趣釈』の作者は、TLV. の「八大菩薩」の構成を承知した上で、このように積したのではないだろうか。

故に、TLV. は、不空の時代までには現形に近い程度までに増広されていたと考えるべきであろう。そして、TLV. は『理趣経』の影響を被りつつその形を整え、『理趣釈』や不空以後の『理趣経』類本の展開に際して、その一助となり得たことが予想されるのである。

- 1) Collected Works of Bus Toñ, Vol.11, 57-64.
 - 2) デルゲ版東北 No.482. 北京版大谷 No.115.
 - 3) 『酒井真典著作集』Vol.III, p.307.
 - 4) 堀内寛仁『初会金剛頂経の研究』, No.5, No.661~774.
 - 5) 梶尾祥雲:『理趣経の研究』, p.93.
 - 6) 頼富本宏: インドの八大菩薩像について, 『中川教授記念論集』, pp.571-572.
 - 7) TLV. の註釈書, Muditakoṣa 造 “Ārya Trailokyavijaya nama vṛtti” (東北 No. 2509)には, / de nas bcom ldan ḥdas la rdo rje ḥkhor lo byañ chub sems dpas ḥdi skad gsol to // sems bskyed ma thag tu chos kyi ḥkhor lo bskor baḥi qyañ chub sems dpas gsol baḥo // (De. Ri. 253b⁵) とあり, 金剛輪と纒発心転法輪は同体として扱われている。
 - 8) 酒井真典:『金剛頂降三世大儀軌法王教中観自在菩薩心真言蓮花大曼拏羅品』, :前掲書 pp.174-185.;『文殊菩薩の五字呪法』, 同 pp.186-198.
 - 9) TLV./の各章の末尾には, すべて, / ḥjig rten gsum las rnam par rgyal ba rtog pa chen poḥi rgyal po las (各尊名) ḥi rtog paḥo //と記されている。
 - 10) 梶尾博士前掲書, p.210.
 - 11) 同, p.227.
 - 12) 金剛薩埵, 欲, 喜, 愛, 慢, 春, 雲, 秋, 冬, 色, (声, 香, 味) 鉤, (索, 鎖, 鈴) の十七尊が説かれる。(De. Ta. 25b-26a¹).
- <キーワード> 『降三世軌』, 『理趣経』, 八大菩薩

(東北大学大学院)